

低頻度反復性磁気刺激療法と作業療法により Alien hand syndrome の改善が認められた一例

Alien hand syndrome(以下 AHS)は Goldstein(1908)によって初めて報告された。その後 Goldberg(1981)が前頭葉内側面に病変を有する患者の右手が意志に逆らって道具を使用する現象を Alien hand sign として報告し、知られるようになった。症状として他人の手徴候、本能性把握反応、道具の強制的使用、拮抗失行などが認められる。しかし、これらに対する明確なリハビリテーション(以下リハ)は報告されていない。右大脳半球一次運動野(以下 M1)の手指領域に対し低頻度反復性磁気刺激療法(以下 rTMS)を実施することにより AHS の改善を認める報告(原ら 2014)がされており、今回我々も同部位に低頻度 rTMS を実施することで AHS の改善が得られた症例を経験したので報告する。【症例】50 代男性。右利き。脳梁を含む左前大脳動脈領域にアテローム血栓性脳梗塞を発症。重度右下肢麻痺となり、リハ目的で 26 病日目に当院へ転院。意識清明。右片麻痺(上田式 12 段階片麻痺機能テスト 上肢 11、手指 11、下肢 2)、軽度の超皮質性運動失語、協調運動障害を認めた。MMSE30 点、RBMT 標準プロフィール 21 点、Kohs IQ 左 116・右 123、Rey 複雑図形模写 35 点と記憶、構成能力は概ね保たれていたが、注意障害、遂行機能障害などの高次脳機能障害を認めた(K-WSCT 実施困難、BADs 総プロフィール得点 15 点)。また、本能性把握反応、拮抗失行、道具の強制的使用、運動開始困難などの AHS を認めた。158 病日目から 167 病日目にかけて低頻度 rTMS を右大脳半球の M1 手指領域に施行した。結果、右の STEF は 98 点から 100 点まで改善、運動開始困難も軽減し、168 病日目に自宅へ退院した。239 病日目に外来受診した際にも STEF100 点が維持されており、AHS は改善していた。本症例の AHS が改善した機序について低頻度 rTMS の効果と文献的考察を加えて報告する。